

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01699

研究課題名（和文）自閉症のコミュニケーション障害に対する自閉的共感の多角的検討

研究課題名（英文）Investigating autistic empathy toward communication disorders in autism

研究代表者

大井 学（Oi, Manabu）

金沢大学・子どものこころの発達研究センター・特任教授

研究者番号：70116911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,900,000円

研究成果の概要（和文）：1）語用障害について問題と思う程度とAQ得点との間で、定型発達（TD）成人では正の相関が、自閉スペクトラム症（ASD）成人では負の相関があった。2）同様の点で思春期・青年期のTD児では相関はなく、ASD児では負の相関があった。TD児よりもASD児が問題と思う程度が低かった。3）TD成人がASD成人のコミュニケーション誤用を不適切と思う度合とAQ得点の間に負の相関があった。4）語用障害を一貫して問題と思うのは母親の12%、TD成人の31%、一貫して問題と思わないのは母親の8%、TD成人の4%であった。ASDの有無により問題と思う程度が異なるか、TD成人が他より問題と思う程度が強い語用障害があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自閉的共感が自閉症に伴うコミュニケーション障害についても生じているかを検討した。定型発達者においては自閉的特性が強いと語用障害や意味障害を否定的にとらえる程度が低く、自閉的共感の存在を再確認した。自閉症のある人の周囲の人の自閉的特性の度合いの違いが、自閉症の人とのコミュニケーション上の軋轢に影響する可能性を検討することが、共生社会を構築するうえで有用となると予測される。一方、定型発達成人の3割が語用障害を一貫して問題であるとみなしており、語用障害に焦点を当てた共生社会づくりの必要性が示された。その際、周囲から特に否定的にとらえられる語用障害について考慮すべきであることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The higher the score of the TD adults on the AQ, the more often they evaluated pragmatic impairments as unproblematic. Contrastingly, the higher the AQ score of the adults with ASD, the more often they evaluated pragmatic impairments as problematic. In the adolescents with ASD, the higher the AQ score, the more often they evaluated pragmatic impairments as problematic. The adolescents with ASD exceeded the TD adolescents in the degree of the permissiveness of pragmatic impairments. In the TD adults, AQ scores correlated positively with evaluation scores of collocation errors made by other adults with ASD. In the mothers, 12% rated pragmatic impairments as problematic consistently and 8% rated those as nonproblematic consistently. In the TD adults it was 31% and 4% respectively. Some pragmatic impairments were rated differently between TD adults and adults with ASD. Some pragmatic impairments were rated more problematic or more nonproblematic compared to other pragmatic impairments.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉的共感 語用障害 意味障害 共生社会

1. 研究開始当初の背景

DSM-5 (APA,2013)では自閉症スペクトラム障害 (ASD) は社会性の障害とこだわりの2点で診断される。このうち前者は「社会的コミュニケーションおよび対人相互的反応の持続的欠陥」とされ、具体的な例として「相互の対人的 情緒的関係の欠落」「非言語的コミュニケーション行動を用いることの欠陥」「人間関係を発展させ、維持し、それを理解することの欠陥」があげられる。これらからいわれることは自閉症における共感の欠如である。Kanner (1943) が指摘した「感情接触の障害」そのものである。ところが最近それに異を唱える研究が2つ報告された。1つは Komeda et al.(2015)で、彼らは自閉症の個人は自分に似た自閉的なキャラクターに認知的に共感する可能性を指摘し、認知的共感が生じている証拠としてfMRI 研究により、自閉症者の脳の腹内側前頭前野が活性化している事実を明らかにした。共感には情動的なものもあり、自閉症者同士でそれが起きていることを証拠立てるには下前頭回の活性化の確認を待たなければならないが、Komeda らの知見は、少なくとも認知的共感が自閉症者同士に成り立つ可能性を強く示唆している。もう一つの研究は日戸ら(2017)である。彼らは子ども時代から成人期(21歳)までの後方視的な15年間の追跡を12事例の自閉症児について行い、自閉症当事者同士の小集団活動を体験したグループとそうでないグループとの間で成人期の社会的転帰に差があることを見出した。ここから日戸らは、一般集団において定型発達児者との仲間・友人関係の形成が難しい自閉症児者も、当事者同士の小集団では仲間・友人関係をゆっくり発達させる可能性があり、それが成人期のメンタルヘルスに寄与する可能性があることを示した。自閉症児者同士の小集団はインフォーマルな人間関係を体験する心理的活動拠点としての役割を果たしており、それが学校や仕事などでのフォーマルな人間関係への適応を促している可能性を日戸らは示唆している。

2. 研究の目的

以上2つの研究から自閉症者同士のかかわりには何らかの共感的な要素が含まれると考えられるが、その内実はまだつまびらかにされていない。本研究は、自閉症者同士の共感の可能性に迫るために、自閉症に伴うコミュニケーション障害に焦点を当てて以下の3つの問いにとりくむ。なお、自閉症がスペクトラムであることから Broader Autism Phenotype(BAP)の個人と自閉症者との共感も必然的に問われることとなる。自閉症の語用障害に対して自閉症者やBAPの個人は認容的か？ 自閉症のコロケーション誤用(意味障害)に対して自閉症者やBAPの個人は認容的か？ 自閉症者同士及びBAPの個人と自閉症者の会話は相互承認的で、認容性の高さが会話の崩壊の修復につながるか？

3. 研究の方法

語用障害に対する認容性について検討するために、定型発達(TD)成人124名、ASD成人29名、TDの中高生32名、ASDの中高生23名からデータを得た。Communication Checklist-Adult(CC-A)の語用障害項目を問題とみなす程度を5段階で評定するよう依頼した。コロケーション誤用(意味障害)に対する認容性の検討においても上記と同様の成人及び中高生からデータを得た。本研究の参加者とは別のASD成人が示したコロケーション誤用(意味障害)を不適切とみなす程度を5段階で評定するよう依頼した。これらの評定結果と評定者のAQ得点との相関を求めた。また、評定結果をASDの診断の有無と比較した。さらに、語用障害に対する評定結果に基づき、語用障害項目による違い、ASDの有無により評定結果が特に異なる語用障害項目、TD成人(母親を含む)の中で語用障害を一貫して問題とみなす個人の割合について検討した。ASD児同士の会話データは10名の小学生から、集団での雑談場面において収集した。

4. 研究成果

TD成人ではAQ得点が高いほど語用障害を問題ではないとみなしていた(図1)。対照的にASD成人ではAQ得点が高いほど語用障害を問題であるとみなしていた(図2)。TD成人とASD成人の語用障害項目を問題とする程度に有意な差はなかった。TD成人では語用障害に対する自閉的な認容性の存在が確認された。TD児ではAQ得点と語用障害を問題とする度に相関はなかった。ASD児ではAQ得点が高いほど語用障害を問題であるとみなしていた(図3)。TD児よりもASD児が語用障害項目を問題とみなす程度が有意に低かった。

TD成人とASD成人のコロケーション誤用に対する適切性評定値に有意な差はなかった。TD成人男性に比べてTD成人女性の適切性評定値は有意に低かった。TD成人ではAQ得点とコロケーション誤用の適切性評定値とのあいだに有意な正の相関があった(図4)。この相関についても男女で違いが見られた。ASD成人ではこの点について相関は見られなかった。

一貫して問題と思うのは母親の12%、TD成人の31%、一貫して問題と思わないのは母親の8%、TD成人の4%であった(図5)。TD成人は母親よりも一貫して問題と思う人の割合が有意に高かった。TD成人(母親を含む)とASD成人とで問題と思う程度が有意に異なる語用障害項目があった。また他の項目に比べて問題と思う程度が有意に異なる語用障害項目があった(表1)。

小6グループでは参加者同士が互いに相手と共有しやすい話題を選択し、会話構造、発話のつながりなどの点で異常性は認められなかった。小4グループでは各自の狭い興味関心に基づく話題が選択され、互いの発話への関心が乏しく、相互交渉の成立は散発的であった。

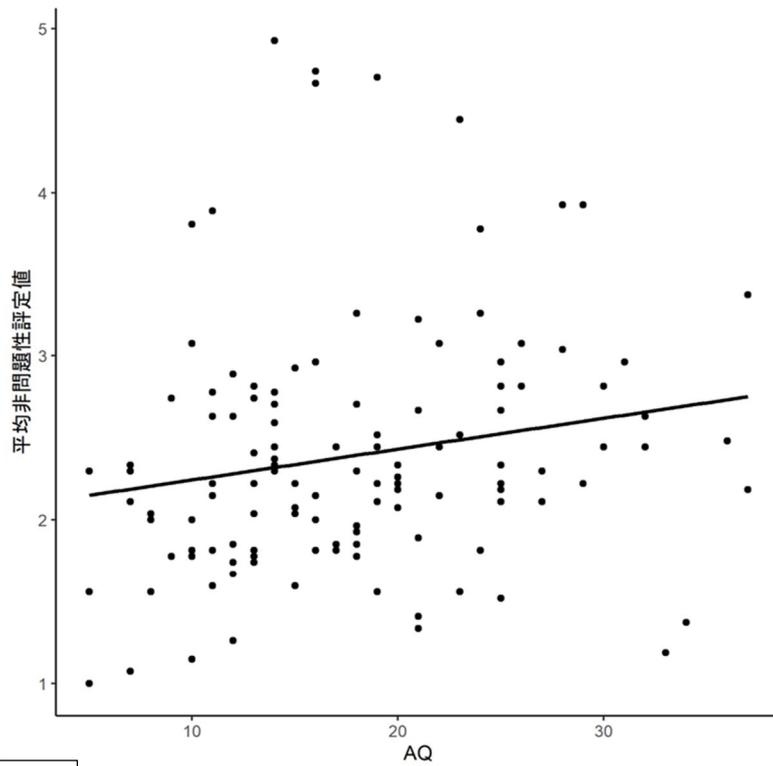


図 1

TD成人におけるAQ得点とCC-A語用障害項目の平均非問題性評定値との相関
($r=.18, 95\%CI[-.01, .35], p<.05$) 評定は「問題である」1点から「問題ではない」5点まで

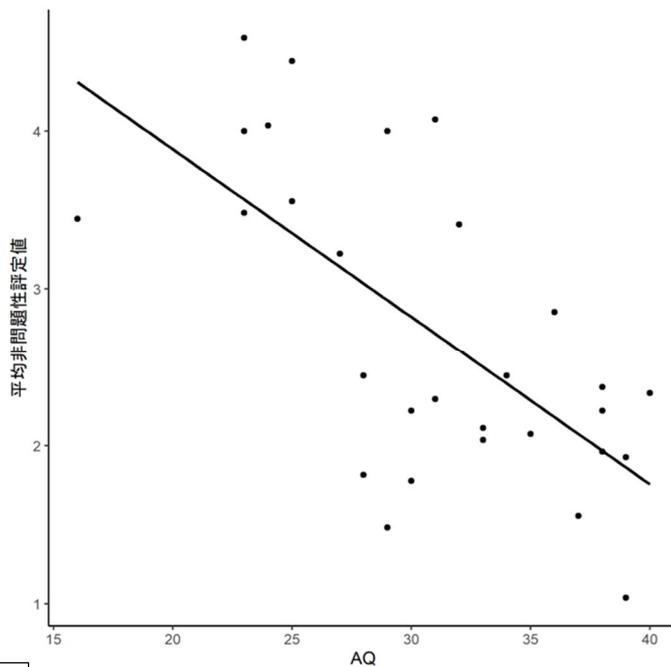


図 2

ASD成人におけるAQ得点とCC-A語用障害項目の平均非問題性評定値との相関
($r=-.66, 95\%CI[-.83, -.039], p<.001$) 評定は「問題である」1点から「問題ではない」5点まで

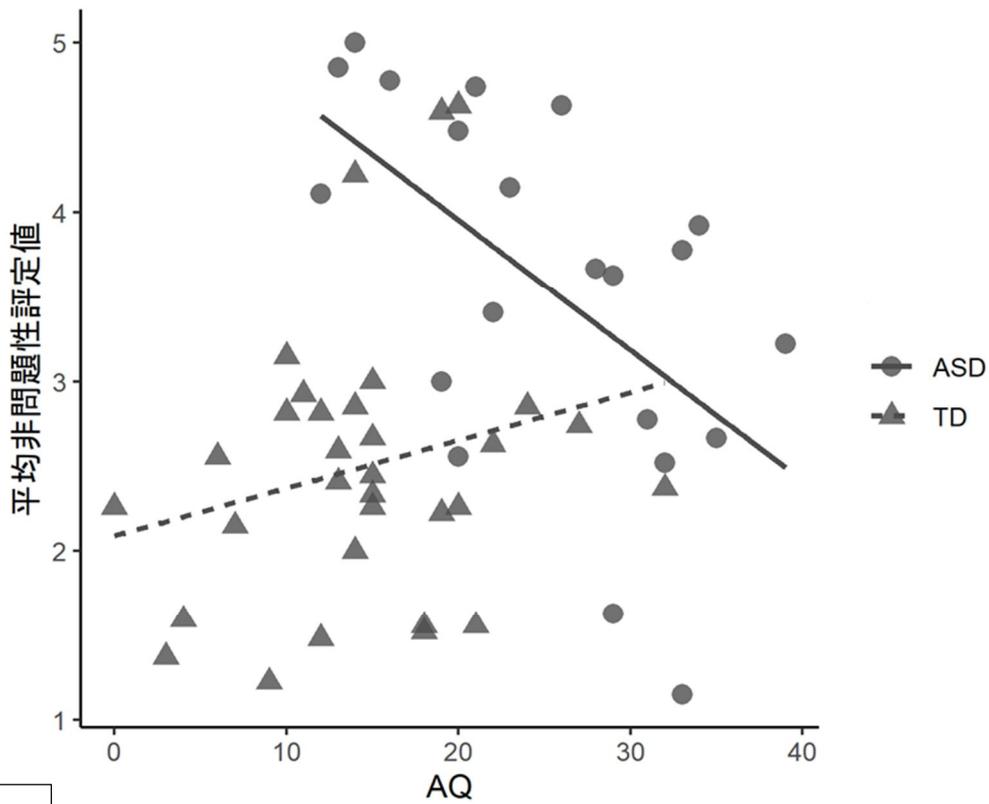


図3 思春期・青年期のASD児とTD児におけるAQ得点とCC-A語用障害項目の平均非問題性評定値との相関 (ASDは $r=-.57$, 95%CI[-.80 -.18], $p<.01$, TDは $r=.23$, 95%CI[-.13 .54]), $p=.23$) 評定は「問題である」1点から「問題ではない」5点まで

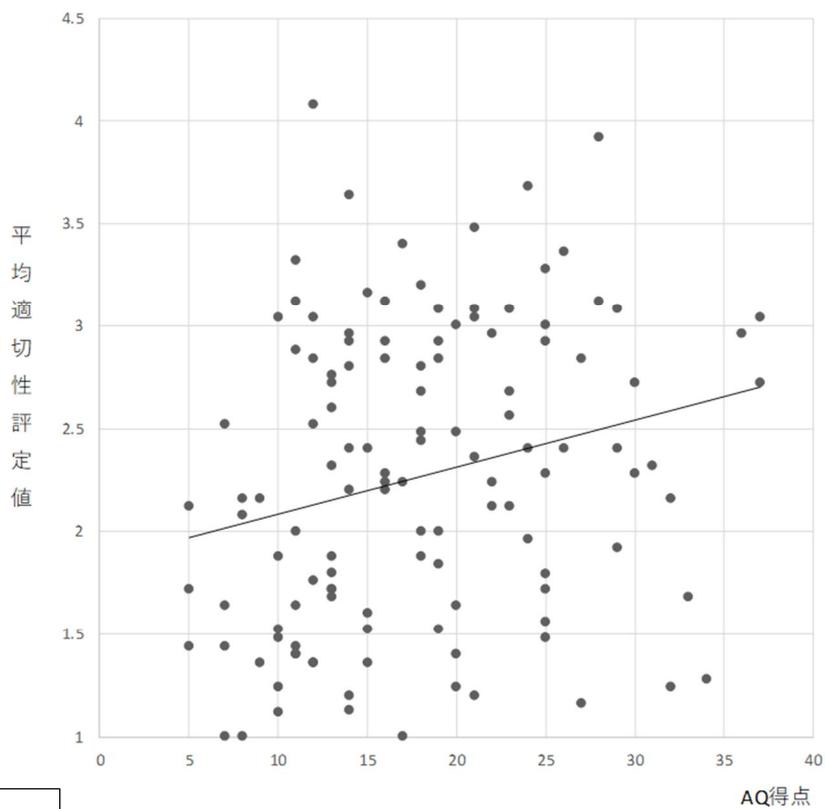


図4 TD成人のコロケーション誤用の平均適切性評定値とAQ得点の相関 ($r=.235$, 95%CI [.062 -.395] $p<.01$) 評定は「不適切」1点から「適切」5点までの5段階。

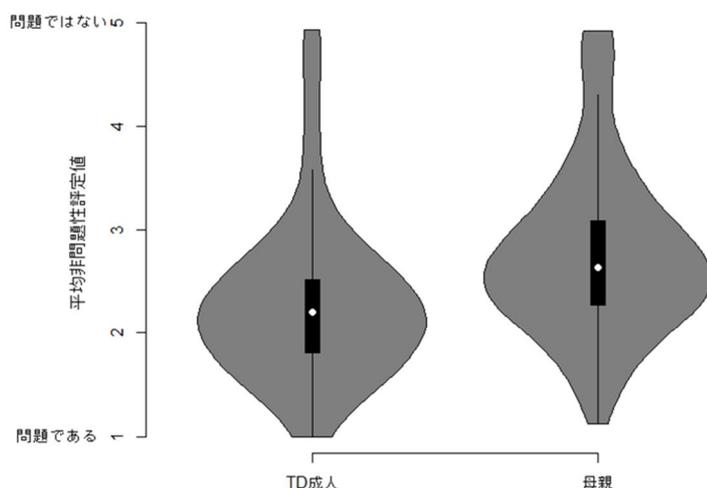


図 5

CC-A の語用障害項目に対するTD成人(n=124)の平均非問題性評定値と CCC-2の語用障害項目に対する母親(n=100)の平均非問題性評定値の分布

注) バイオリンプロット中央の○は中央値、黒線は四分位を示す。
年齢をそろえたTD成人女性と母親の間には有意な差がある ($p < .001$)

表 1 母親または TD 成人において CCC-2 及び CC-A の語用障害項目内で他の項目より有意に項目別平均非問題性評定値が高いか有意に低い下位項目

下位項目	項目別平均非問題性評定値 (SD)	多重比較
相手がすでに知っていることを話す。	3.50(.937)	$p < .01$
相手が気分を害したり,おこっていたりするのに気がつかない。	2.24(1.092)	$p < .05$
場面にとって礼儀正しすぎることをいう。例えば,おいしい食事を食べて,「おいしゅうございました」という。	3.52 (1.233)	$p < .001$
覚えている物事のリストについて話す。例えば,世界中の国の首都の名前,スポーツのチームの成績。	3.27 (1.198)	$p < .001$
シチュエーションによってコミュニケーションの能力が変動する。例えば,親しい人と一対一で話すときはやっていると集団の中では自分の言いたいことをいうのが難しい。	3.04 (1.171)	$p < .01$
他の人から会話に誘われても無視する。例えば,「何をしているの?」と聞かれても,見上げることなく自分の仕事を続ける。	1.65 (1.106)	$p < .01$
悪気はないのに他の人を傷つけたり気分を悪くさせたりする。例えば,他の人を怒らせる「無遠慮」なことをいう。	1.73 (.989)	$p < .01$

・ 太線より上は CCC-2,下は CC-A の下位項目

・ 網掛けは評定値が平均値最近似項目より相対的に低い方を指す。評定値は「問題である」1,「やや問題である」2,「どちらともいえない」3,「やや問題でない」4,「問題でない」5である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福田純子, 平谷美智夫, 三浦優生, 大井 学	4. 巻 38
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害のある成人におけるコロケーション誤用生起とその特異性についての検討.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田純子, 平谷美智夫, 三浦優生, 大井 学	4. 巻 38
2. 論文標題 自閉症者のコロケーション誤用に対する自閉症者の認容性.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田英嗣・西田マリア	4. 巻 64
2. 論文標題 物語理解における時空間となつかしさ.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 88-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takagi, T.	4. 巻 3
2. 論文標題 Referring to past actions in caregiver-child interaction in Japanese.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Research on Children and Social Interaction,	6. 最初と最後の頁 92-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大井 学、水谷柳子、福田純子、平谷美智夫	4. 巻 38
2. 論文標題 成人におけるBroader Autism Phenotype の程度または自閉症スペクトラム障害の診断と自閉症者のコミュニケーション誤用に対する認容性との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 194-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大井 学、水谷柳子、福田純子、平谷美智夫	4. 巻 39
2. 論文標題 成人におけるBroader Autism Phenotype の程度または自閉症スペクトラム障害の診断と語用障害に対する認容性との関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コミュニケーション障害学	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日戸由刈	4. 巻 14
2. 論文標題 ASDの中学生女子が語る友人関係と自己認識 - 3事例への半構造化されたインタビューを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子ども教育研究	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 日戸由刈・藤野 博・武部正明・米田英嗣・大井 学
2. 発表標題 学齢期のASD児同士で雑談は楽しめるのか？（2） - 発達的变化の検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会（2021年3月）ポスター発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 米田英嗣
2. 発表標題 言語習得の心理・神経基盤および教育への応用
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大井 学・水谷柳子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム指数(AQ)が高い成人ほど語用障害と意味障害に対する認容性が高い
3. 学会等名 日本コミュニケーション障害学会第46回学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木智世
2. 発表標題 相互行為秩序と間主観性：定形発達児・非定形発達児の相互行為
3. 学会等名 日本語論学会第23回大会 シンポジウム：会話分析の基軸と展開.(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤野博・松井智子・東條吉邦・計野浩一郎
2. 発表標題 ASD児の言葉の好みと認知特性
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大井 学・水谷柳子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム指数 (AQ) が高い成人ほど語用障害と 意味障害に対する認容性が高い
3. 学会等名 日本発達心理学会第 3 1 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日戸由刈 ・ 藤野 博 ・ 武部正明 ・ 米田英嗣
2. 発表標題 学齡期の ASD 児同士で雑談は楽しめるのか? - 「ある・ある! タイム」の会話分析を通じて -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 合崎京子、藤野 博、松井智子、東条吉邦、計野浩一郎
2. 発表標題 ASD児の名詞句の使用と対話者との共通理解との関係
3. 学会等名 日本発達心理学会第 3 3 回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大井 学	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 129
3. 書名 子どもの「コミュ障」: 発達障害のもう一つの顔	

1. 著者名 米田英嗣	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 利他性を導く多様な共感性(亀田達也「モラルの起源」についての書評シンポジウム). 児童心理学の進歩 2020	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤野 博 (Fujino Hiroshi) (00248270)	東京学芸大学・教育学研究科・教授 (12604)	
研究分担者	高木 智世 (Takagi Tomoyo) (00361296)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	日戸 由刈 (Nitto Yukari) (40827797)	相模女子大学・人間社会学部・教授 (32707)	
研究分担者	米田 英嗣 (Komeda Hidetsugu) (50711595)	青山学院大学・教育人間科学部・准教授 (32601)	
研究分担者	田中 早苗 (Tanaka Sanae) (80811372)	金沢大学・子どものこころの発達研究センター・特任助教 (13301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	合崎 京子 (Aizaki Kyoko) (70867936)	東京学芸大学・教育学研究科・日本学術振興会特別研究員PD (12604)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	綿貫 愛子 (Watanuki Aiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関